**説教20231224ルカ2：8-21「クリスマスの喜び」**

**クリスマスおめでとうございます。私たち一人ひとりを、深く深く、そして広く広く愛して下さるイエス様のお誕生日をこうして皆さんで集まって喜び合えますことを、大変うれしく思います。そして、聖書に出て来る、羊飼いたち、マリア、ヨセフたちとも同じ喜びを喜び合えることも又、素晴らしいことです。**

**このイエス様の誕生日でありますクリスマスですが、では大体１２月２５日を中心にしてみんなで集まってお祝いしようということになっていますが、実は、歴史上、イエスキリストが何月何日に生まれたのかは、はっきりとわかっていません。しかし物事と言うのはこの様に、はっきり分かっていないからこその良さもあるもので、私などは、毎朝、イエス様の御誕生日を喜び、お祝いして、イエス様から新しい命を頂いております。**

**何故、歴史上、イエスキリストの生年月日が明らかではないかと言いますと、それにはいくつかの理由が考えられます。第一に、全ての人の救い主としてやって来られた、王としてのイエス様を、時の権力者であるヘロデ王を始め、その取り巻きの人たちは喜ばなかったし、むしろ殺そうとさえしたので、歴史の記録には残らなかったということです。**

**第二に、神の子としてこの地上に降りてこられたイエス様の栄光の光を見ることが出来たのは、この時、羊飼いたちなど一部の人間に限られていたということです。**

**この様な理由から、イエスキリストのお誕生日は、歴史の闇に葬り去られようとしました。しかしながら、主の栄光の光は、その闇を明るく照らし、イエス様のお誕生日は、羊飼いたちから始まって、今の時代に生きる私たちの口を通して告げ知らされ、今も歴史の闇を明るく照らし続けているのです。**

**羊飼い、と言いますと今の日本ではあまりなじみがなくお目にかかれない職業ですので、ご説明しましょう。羊飼いと言うのは、とても重要な国家的な職業です。今の言葉でいえば、エッセンシャルワーカーにも該当することでしょう。羊飼いと言う語感から、私たちはややもすると、犬や猫を飼っているというようなことと一緒くたにしてしまうかもしれませんが、そうではないのです。羊飼いは、羊を養い育て、大きく成長させると言った大事な役割を果たしています。そして羊は、その毛が用いられ、又、人々の食料となり、又神殿に備えられるささげものともなったのでした。**

**羊飼いは、羊を養い育て、成長させるために欠かすことのできない、大切な仕事として、イエス様が生まれる前の旧約聖書の時代のイスラエルの国では、特に重んじられ、みんなから認められた職業でした。あのイスラエルのダビデ王も若かりし頃、羊飼いを職業とし、自分の命を賭けて、羊たちを守りました。ダビデは聖書の中で次の様に言っています。「は、父の羊を飼う者です。獅子や熊が出て来て群れの中から羊を奪い取ることがあります。そのときには、追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。」（サムエル記上17：31～）**

**この様に、命を賭けるほどの価値がある職業である羊飼いですが、今日の聖書箇所で、イエス様がお生まれになった時代には、羊飼いと言う職業は、みんなから軽く見られ、まれるような職業へと変化してしまっていたのでした。**

**命を養い育てて成長させると言った大切な中身がある職業が、時代の変化と共に、人々から顧みられなくなる、ということは何時の時代にも起こり得ることです。今の日本を省みますと、数十年前までは小中学校の先生、と言う職業は、命を賭けて取り組めるやりがいのある職業とみなされ、先生を志す人も多かったです。しかし、数十年経った、、先生と言う職業は、志す人も減り、かつての輝きを失っているように見えます。**

**この様に大切な中身がある職業が軽んじられ、社会や国家においてその実りが得られなくなってくる、という事態は大変悲しく、暗い事態です。そして、この様に人々が全体として、悲しく暗い事態に向かっていくということは、誰が悪い、誰のせいだと言ったことでは解決できない、もっと大きな事柄だと言えるでしょう。この様な人間全員が持っている、的外れな歩みのことを聖書では、罪があると言います。私たち人間には、この様に罪があるので、よい羊飼いがいないと、てんでバラバラに、悲しく暗い方向へと向かってしまうということです。**

**イエス様が、お生まれになって私たち人間のところに来て下さったのは、私たち罪ある人間が誰しも持っている、その悲しく暗い心を、喜び祝う心へと変える為です。**

**主の栄光の光、というのは、太陽の光よりも確かな光です。主なる神は太陽の光をも造り出された、まことの光です。太陽の光は、いつか終わって消え去ることが考えられます。しかし、光の造り主である、主なるイエスキリストは、永遠の御方です。私たちは、その主からの永遠の光に導かれて歩まされるように、主の栄光に照らされているのです。**

**イエス様は、人間だけでは、てんでバラバラに、悲しく暗い方向へと向かってしまう今の世の中に、主の栄光の光を照らして、私たちが喜び祝うことが出来る道へと導くためにこの地上に生まれて下さったのでした。**

**今日の聖書箇所に記されている通り、神の子イエス様は、人間として、それも寄る辺ない、誰かに養われないでは生きていけない赤ちゃんとして、私たちの処へと来てくださいました。それから、３３年の生涯をこの地上で送られ、沢山の人々を愛し、最後には人々の嫉妬心によって十字架に付けられ、死なれました。しかし、父なる神は、最愛の一人子イエス様を、その死から救い出して、彼に永遠の命をお与えになり、天の国へと引き上げられたのでした。**

**この十字架の向こうには、主の栄光の光が永遠に輝いています。私たちもイエス様の復活の道行きを信じて、イエス様に従って最後まで歩む時、確かに自分自身にも永遠の命が与えられるのです。**

**しかし、実際の今の社会で、イエス様を喜びお祝いするということは、時に、この世のしきたりに逆行することとして、辛い思いや仕打ちを受けることもあるでしょう。羊飼いはおとなしく、羊飼いらしくしていろと言ったみの声が聞かれるのが、現実のこの社会の暗さなのです。**

**しかし、私たちには、御子イエス様と言う、まことの喜びと祝福のしるしが、常に与えられています。御子イエスの目に見えるしるしと言うのは、布にくるまって飼い葉おけの中に寝ている乳飲み子としての姿です。その姿は弱々しく、そして現実的に、決して清潔とは言えない汚らしいところに置かれた姿だったのでした。**

**イエス様は、私たちの羊飼いであるとも言われています。私たちはイエス様に養い育てられる羊の様であります。羊飼いであるイエス様は、この私が、暗く、汚らしく、絶望的な境遇に置かれたとしても、この私の処へ来て下さって、この私を救い出して下さる救い主であります。**

**そのイエス様は今、どこに居られるのか、彼の処か、彼女の処かと、私たちは捜し回り必要はありません。イエス様は、もうすでに、私たち一人ひとりの心と体の中に住まわれようとされています。そうして、私たち一人ひとりの日々の生活を、常に見守り導かれるのです。どうか私たちが、このクリスマスの時、イエス様のお誕生日を確かに知らされて、これからイエス様のことを信じて、喜びと祝福の道を共に歩むことが出来ますよう、お祈りをして参りましょう。**